史料翻刻

奥宮慥斎日記——明治時代の部（三）——

島　善高

解題

本号には、奥宮慥斎日記の明治三年八月から同年十二月までと、関連史料三点を翻刻した。翻刻順に掲げると次の通りである。

①「東京日記」（受入番号七—四八）の八月一日条以下全部。

②「明治三庚午秋九月、在東京、備忘日録」（高知市民図書館蔵「奥宮文庫」受入番号七—四九）の最初から十二月三十日まで。

③参考一、「皇朝身滌規則」（明治三年十月頃草稿、明治六年七月出版）（高知市民図書館蔵「奥宮文庫」受入番号二—六七。及び同図書館蔵平尾文庫「修史余禄」二七）

④参考二、「人民平均ノ議」草稿（明治三年十月頃）（高知市民図書館蔵「奥宮文庫」受入番号六—九四）

⑤参考三、「喩告」（明治三年十二月）（高知市民図書館蔵平尾文庫「修史余禄」二七。丁野遠影『土佐藩政録』昭和五十五年十月、歴史図書社刊、六二五頁以下）

明治三年六月二十七日、神祇官権大史に任じられた奥宮慥斎は、八月二十日、職務が祭典、公事裁許、往復、受付の四課に分けられた際、「府藩縣願書届及諸社報告等之事」を掌る受付の担当となった。日記には相変わらず職務の具体的な内容については殆んど記録していないが、面会した人物の名前は実によく丹念に記録している。

職務上、上司である神祇少副福羽美静の名が散見されるのは当然としても、フルベッキや右大臣三条実美の名が畳見することには注目しなければならない。フルベッキとの面談が多いのは、この当時慥斎は、参考一に掲げた「皇朝身滌規則」を執筆している最中で、それに対するキリスト者の意見を聞くためであった。フルベッキの

意見は巻末に「身滌規則跋」として掲載されており、心身を清浄にする法が日本にもあることを驚きの目で見ている。また三条と会っているのは、この「皇朝身滌規則」を公式のものとして発布して貰おうと考えていたからである。慥斎の「請仮選教典議」（高知市民図書館蔵「奥宮文庫」二―三七）に

身滌規則ハ嘗テ神祇少副ノ鑑識ヲ経、コレヲ外人ニモ質シ、私カニ他日異宗濫入ノ預防ニ充ントス、因テ此ヲ　朝ニ行ハントシテ未果

云々とある（この経緯に就いては、杉山剛「高知における大教宣布―奥宮慥斎の活動を通して―」『社学研論集』一四巻参照）。結局、「皇朝身滌規則」は日本全国に行なわれることはなかったが、明治四年五月十九日、高知藩内に限って施行されることとなる。

慥斎日記にはまた、板垣退助の名前が度々記録されている（八月二日、九月十二日、十月二十三日、閏十月二十二日、十一月二十日、十二月五日、十二月十日）。この頃板垣は政府の参議であるが、他方、高知藩の藩政改革にも関わっていた。平尾道雄『土佐藩』（吉川弘文館、昭和四十年四月）によれば、明治三年閏十月二十四日に高知藩大参事となった板垣は、同じく権大参事になった福岡孝弟とともに、士族制度その他の改革に取り組んだが、その際の指導理念が「人民平均の理」であった。例えば、明治三年十一月七日、高知藩知事が政府に伺い出、高知藩限りで施行することが認められた身分制度改革に

一、人民平均ノ理ヲ主トシ、士族文武ノ常職ヲ止メ、同一人民中ノ族類ニ帰スル事
一、官員兵隊ヲ立ルハ、官等官禄ヲ以テ士族・卒・平民中ヨリ撰擢スベキ事
一、士族ノ禄制ヲ変シ、更ニ禄券ヲ給シ、家産ト視做スベキ事
一、士族ノ常職ヲ解キ、別ニ兵隊常備ヲ立ツベシ、故ニ従来世禄ノ何分一ヲ削リ、兵給ニ充ツベキ事
一、士族・卒・平民、各其族類ヲ分ツノミ、農工商ハ人民ノ治業ニ帰シ、族称ニ関セザルベキ事
一、藩廳ヲ視テ一藩ノ民政司ト做シ、国民一般戸籍ノ法ヲ立ツベキ事

とあるように、冒頭に「人民平均ノ理ヲ主トシ」と書かれている（佐佐木高行日記『保古飛呂比』第四、四七四頁以下）。この「人民平均の理」を理論付けした文章が参考二として掲げた「人民平均ノ議」草稿であって、慥斎が板垣と何度も会っているのは、その相談のためであると見なければならない。

慥斎は、板垣とともに、十二月二日に東京を発ち、十日に高知に戻った。そして十五日、「第五等官大属書記係」に任じられ、十六日から「喩告文」を草することになった。日記の十二月十六日条に見える「草喩告文」というのがそれであるが、この諭告とは、参考三に掲げたものであって、板垣退助監修『自由党史』（上巻、岩波文庫本二九頁以下）でも「自由平等の宣言」として特筆されているものである。

なお、岩波文庫本は「喩告」を明治三年の十一月として掲載しているが、これは明らかな誤りである。岩波文庫本が典拠として挙げ

ている『土佐藩政録』でも、十二月となっているからである。

（明治三年八月）

「八月記」

朔、晴、早起、爽気可人、隠几讀書雑書、晩訪細川生于八丁堀、聞外国近状、生會見召箱崎　太公、便辞与出門北、遂訪福羽少副於小川街、飲楼上、夜涼風吹、燈々数滅、小野権判官亦来話、且話且飲、更深矣辞去、獨歩街頭、南風烈吹滅燈、帰邸已報十二字云、酔甚眠不知

二日、晴、早起、藤川三渓来云、欲訪板垣氏、即价之、板生適疾、不遇、乃訪松岡欲訥、予則別出官、晩老婢宿婢等来侑酒、乗酔携出街、使聽話家円朝、予半眠、至円朝忽覚、奇趣可解頤、帰過尾張屋、直帰、亦客中一適矣

秋風の吹ニつけても思ふかな　布師さとの松の木の本

三日、晴、藤川亦来、示所著千文解等、予別出官、無事、松岡同僚出、与調任紙官印、未後退衙、裸眠取涼、官帰途中、示奥同僚

人しらぬ深山かくれの谷底ハ　秋立風もよきて吹らん

夜、散歩街頭取涼、訪藤川三渓、与倶訪細川潤次郎、飲楼上、二更辞去、夜過半、騒雨俄然至

四日、晴、秋氣堪掬、出官、青柳同僚、是日始出勤云、奉使出雲大社、自四月至今日、山川跋渉、蓋可羨

五日、雨、終日最暴也、出官、無事、写薩人横山生建白書、渠先月廿六日上書、割腹集議院門前、其言十ヶ條、可謂剴切矣、門脇大祐亦継之上書、自歇登官

六日、午後新霽、与林福二生散歩、聽話家於日本橋東、帰飲一楼、夜帰、酔眠不識、是日小畑生見訪、談話移刻、尹近轉官云

七日、晴、早起、心下微痛、因告官養摂、無事、以看書消遣、夜無事、是日雨甚

八日、稍霽、出官、無事、雨甚、未後退食、欲浴湯途、復發胸痛、忍痛反邸舎、招医生飲沸騰剤、稍覚痛去、豚児及宮崎生等来訪、更深矣漸就寝、雨甚、雷聲亦頻也、僕兼二老婆等、看護尽心

九日、新霽、秋爽可愛、晏起覚筋力猶拘牽、下利一行、蓋因薬効、告疾於官、保護

十日、晴、秋氣可掬、無事、欲出官遂休、楠瀬春斎来訪、話旧、是日灸治、謙之来、付一圓金、喜去、命婢買牛肉、弐朱、菓子一朱、晩散歩街頭、夜、無事、拉宮崎生訪友、過大村生、会緊要不遇、又訪大隈氏、暫話、薩士石井某亦来會、小酌談時事、尹亦歎吾輩所歎、可謂以水救水、云近日西郷某（吉之助男）帰自西洋、昨共謁條公、吏以其洋服且多弊、疑外国人、漸辨解以通謁、大可笑、因問近日新服、云孛亦遂敗矣、仏稍得志、如此勝敗互角、必可延緩無期、大受害於全地球上、可痛哭、薩士早還、予亦辞去、酔吟月明中筑地

十一日、晴、暑猶酷、朝訪勝麟太郎於赤坂紀邸、暫話、書生多来訪、因辞去、晩又漫歩、過藤川氏、直辞去、遂抵柳原、度和泉橋、訪穂積耕雲、雲適疾、暫話出門、天既昏矣、蹈月漫々地歩、到両国橋外、入劇音場、聽劇、夜蓋三更帰邸、病脚憊甚

十二日、晴、出官、無事、門脇大祐亦出官、前日自該書、官允之云、写弾臺上書及書生某（野村竹平）建言、皆言横山生之事、退食、藤川生折簡見招、乃往、命舟納涼于両国橋下、両岸歌吟如涌、月光射波、洸漾離奇、有化登之興、溯月於柳橋外、登一楼飲、雑客紛々、早下就船、又泛中流玩月、是日倶遊者、勢人磯邊某、書生某与藤川氏、併妓小女凡六名矣、返棹時既更過三、帰酔臥邸中、百不識

十三日、晴、朝藤川生見訪、出官、無事、退食後、同僚松岡姓見訪、被恵手製茶、伊賀・利岡生等来話、豚児亦来、夜与児同浴、過医生町権造、不在、月色奇明、清風吹袂、獨歩街上、可歎一酒徒

　洒もよし月影清し風涼し　相思ふ友のなきそかなしき

忽憶得、昔越知生有詩云、洗脱華陀扁雀鹿、西洋大道欲通神、辞家海内偏求友、百億萬中無一人、酔歌此詩亦一興矣

十四日、晴、早起、受胗於十梶春泉、々云、良麻之遺毒也、可寛

治、出官、無事、退食、作寄弟書、付濱田某帰国、書生来訪、晩与吉永良吉飲一酒楼、賞月、時有弄劇音者、乃延演之、以為慰、亦一興也、歩月繞市上、涼風吹酔面、明夜之晴可卜也、是日同僚奥並継、懇問余事、因略述其事情、夜四更寤而不寝、剪燈讀書、蟲聲四壁、静閑殊有客況、詩歌久廢、有情而無辞、然不欲強呻吟、唯誦古人歌詩耳、頃日借松七後撰集、此集亦亜古今、極多名歌、即摘一二

いつとても月ミぬ秋ハなき物を　ワきて今夜のめつらしき哉

人ハいさことはともなきなかめにそ　我ハ露けき秋もしらるゝ

露ならぬ我身をおもへと秋の夜を（ハイ）　かくこそあかせおきゐなから

に

をくからに千草の色ニなるものを　しら露とのミ人のいふらむ

秋月常にかく照るものならハ　やミにふる身ハましらさらまし

十五日、暁起、点燈看書、秋爽可愛、大霧起、四面不辨、出官、無事、點検書籍、晩微痾、謝藤川氏約、今夜穂積生亦以疾謝、中秋果無月

年々に今宵の晴を祈りしも　つもれハ老の数と成けり

足達武五郎云、熊本人

年々に今宵の月のくもれるハ　来居る夷の胡砂や吹らん

いさ更ハ胡砂吹はらへ玉簾の　内外もワかすくもる月影

昨夜所詠雑歌数種、憶起即録

明日の夜の晴むハしらすよしさらは　今宵の月を賞明さはや

かしましき人をしつめて後ニこそ　市路の月ハ見るへかりけれ

宵のまハ雲のまよひもあるものを　更はて、見る月のさやけさ

いきたなくねる人ハねよ月夜よし　夜よしと告ん友もなき世に

村鴉汝も秋をやかこつらん　ねくらはなれて月に啼也

貫とめてすまるの玉とめてな南　月にみかける野への白露

獨りのミ詠る窓にさし入て　こゝろのくまを照らす月影

むさし野や恵の露のかゝる代ニ　いや照まされ秋の夜の月

十六日、晴、養微痾不出門、豚児来護、医十梶生来云、稍有熱、投泡剤三帖、中江生来話、時友人某被贈焼鰻魚、即命飲、尾張屋老婢、齎来洋酒一壜来（マヽ）、價壱分壱朱四百銭、和糖及卵、飲一盞、尤補胃云、与二三子飲、相留半日、細話心事、座客皆散、不堪無聊、乃曳杖于街頭、過檜物街浴温泉、訪一女不遇、不歎中風、即帰臥、夜炎甚、謙児来宿

十七日、陰、告疾小臥、官舎閑甚、借讀詩集遣興、松毅堂見示歌数首、掬一首

はつかしな我白髪を隠せとや　月も雲間に見へミ見へすみ

予乃賡歌

いかにせむ白髪のかすも増鏡　千尋にあまる老の俤

是そとて数るうさもなき身さえ　なかき白髪の老となりけり

月かけの照らぬもよしや老らくの　白髪のかみの身をかくせとや

老去風情更懶慵、強将秋興付秋蟲、恍然憶起卅年夢、雲想衣裳花想客

十八日、晴、養痾在蓐、諸友来訪、談話移晷、以此消病魔、是日清閑

十九、晴、猶在蓐、朝告官以未愈、辰後邸内太騒匆、云硝薬庫失火、有暫打水即消云、晩小畑生吉永生等見訪、遂相拉散歩、浴後飲日本橋外西楼、太酩酊、夜与小畑生別、与吉永生歩街頭、帰臥

念日、涼気襲膚、早寤、点燈看書、疾已、出官、無事、官分課四、一日祭典、二日公事裁許、三日往復、四日受付、予受付之課也、受付職掌、府藩縣願書届及諸社報告等之事、大谷権少祐為之長官、席亦大変

念一日、晴、早起、乗涼遠歩北郊、拉謙児・僕兼等遊飛鳥山、王子、瀧川、午飯王子野店、是日遊人亦有、遂取路田間、探日暮里、廻下谷、晩飲山下、訪伊賀生于不忍池、酔眠一晌、夜帰浴、入邸已報更二

念二、晴、出官、無事

念三、晴、秋爽可掬、出官、分課初行、予當受付、掌文書往返、不堪繁蕪、然事固寡少、不足辨、晩訪古（盤）、以疾辞、即出訪斎藤氏、暫話、移刻、夜更帰

念四日、晴、早起、秋氣可愛、出官

念五、晴、出官、無事

念六日、晴、早起、拉豚児等観劇場、終日亦一消遣閑愁耳、夜買酔帰

念七、晴、告疾、臥官舎、呻吟蓐上、書生来訪、是日林有三奉命適西洋、余為贈旧作長篇

念八、雨、終日蕭然

念九、雨、越前藩井手某来訪、夜書生豚児等来話

（明治三年九月）

九月

朔日、新霽、休暇、猶在蓐、麻布人来訪云、従五位公来東京、詩文稿請刪定、晩始浴理髪、散歩街頭、頭兮々未已、乃帰、夜不出、点燈讀小説、付金豚児等、謙児来宿

二日、微陰、早起、令試謙讀訳書、初出官、無事、講義尤蕪雑、不堪聞、余謬傷額、木村史生為敷薬、速愈、従今日已出未退云、今日老婢適麻布未還、夜老婆不返、必宿麻布辺歟、散歩近傍、早帰臥

戯示学徒　豊後三浦梅園先生

一、学問ハ飯と心得へし、腹ニあくか為也、かけ物なとの様に人に見せんする為にはあらす

一、書物ハ金かしの帳の様なるもの也、金なき人の持らむハ渋紙ふむほとの用ニこそ

一、学文ハくさき菜の様也、とくと臭ミを去されハ用かたし、少讀書ハ少学者臭し、餘計讀書ハ餘計学者くさし、こまりもの也

一、学文を芥の様ニ思ふへからす、上ニ浮たかる程に下地の水も今ハのまれす

一、学文ハ置所ニより善悪わかる、臍の下よし、鼻の先悪し

一、学文ハ軽業のやうニするか悪し、軽業ハ人を目の下ニ見おろし人の天窓をふむもの也

一、衣裳うつくしく飾り人ニすかれんとするハ賣女也、人の見る時所体をなし、人に誉られんとするハ歌舞妓のもの也、今の学者とふやら此真似する様也

一、碁の打様ハいつにても先をとれハ負ぬものと我も知り、とかく道理ハのミこみよし、態のきかぬか笑止也

一、足の皮ハ厚きかよし、面の皮ハうすきかよし

一、人諸共に小賢しく口ハきけと行ハ女童ニ見限らる、さる故面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむこと多し、よく心得て慎むへし

三日、微陰、早起、浴水、為書生講論語、出官、無事、退食、僕不来、借履獨帰、老婢未帰晩、獨酌遣悶

無題

花瓶にさしも習はぬ姿にて　なにゝ野菊の手折ニけむ

牛の尾に取つき歩行里の子か　しらふる笛の音こそ高けれ

晩退食後、拉漾生飲一酒楼、夜帰、價二分弐朱三百銭

四日、秋陰暗澹、十字出官、談福留氏官舎事、因聞国情、晩散歩市上

五日、微陰、早起、講論語三章、出官、無事、退食、田中生来、相携歩両国橋下、夜帰、訪佐藤権少史於箭庫、暫話、借愛日楼先生行状一卷

六日、霽、無事、午後訪磯部某于神田鍋街、飲一酒楼、酔甚、又返磯部氏逆旅、被命飯、晩還邸舎、下婢来、云日本橋川瀬石町惣右衛門店、白田重庵女、月給三分、相政周旋云

無題

おのつから染とはなしニ白露の　千草におけれハやかて色なる

むなしきやかて色なる秋の野に　何しら露の花ニおくころ

七日、朝雨蕭々、吉永氏来話、咳嗽甚、因告病臥官舎、乞戸梶医生散剤、晩買酒、豚児等来、共団欒酌之、老婦人買牛肉来、乃為下物、新来婢亦佐酒、稍有客興、夜早寝、雨徹暁不歇

終夜のきニ音する玉水ニ　聲あはす也床の蟋蟀
我妹子か寐くたれ髪を終夜　なて尽してもむしの鳴蘭
燈の背けし壁に鳴虫の　夜たゝ尽せし聲あはれ也

八日、早起、風雨晦冥、終日不歇、裁家書消遣、僕買酒来、午飯満酌、乗興揮灑、為田中生等嘱、稲魂社額字也、酔甚、乃午睡、亦一楽郷也、晩風雨歇、是日

帝観兵隊於越中島、風雨太暴、我藩兵僅為練兵、乃因風雨廃云、新島原妓楼、為風雨所損壊、因傷人、或云即死三人、未詳、夜浴薬湯、咳嗽不歇、不能快寝

九日、新霽、重陽、延医戸梶生受胗、又投散剤、書生来嘱稲荷社額字、即揮洒稲魂社三大字与之、婢母来理髪、豚児来、書生等数人来話、晩雨零々至、終日不出、養痾在蓐、夜無事、早寝、咳甚不能臥、生田医生来訪、以即湯和糖温服、稍□有功、夜半復発

十日、秋陰猶暗澹、早起、養痾在蓐、看書消遣、晩浴薬湯

十一日、秋晴、午後出街、浴後散歩、訪町医官受胗、云咳必可愈、不足憂、暫話辞去、是日稲荷社賽祭、士女雑沓甚、夜詣社観燈

十二日、晴、早起、出官、無事、未後退食、散歩街頭、夜訪板垣氏、云明日帰郷、終夜談話、至燭見跋、月色奇明、明日之晴可卜、是夜有少不平事、患気難除、半時強、忽然霽矣

十三日、晴、早起、理髪、出官、無事、未後退食、婢母来綴衣服、晩老婢亦来、夜皆帰、予買古衣服、價四両三歩、夜早寝、無事

十四日、秋陰冷澹、袷猶覚冷、早起、出官、無事、晩雨、松岡同僚、明日被命鎌倉行、未後退食、脚子至自故郷、収家書数章、一家皆平安、被贈金十両、森澤禄馬来訪、余不在、夜雨蕭々、夜洒井生見訪、暫話、辞去

十五日、秋陰、雨氣未収、冷如初冬、未後退衙、微雨簾々、退食、無事

十六日、秋陰如昨、岩村氏价来、与松岡毅堂訪岩村有助於礫川金剛寺坂上、点茶饗応、有助老人亦奇人也、話談移刻、喫飯飲酒、晩帰途廈看書畫於骨董店、留守渡辺修斎、森沢禄馬被尋、夜雨氣冷澹襲人、閑無事、獨酌遣興

十七日、秋陰如昨、北風稍峭冷、晏起、出官、無事、未後退食、買牛酒飲、浅川・利岡生等来話、是日戸梶医生来、乞借金、便付二圓金、僕兼生亦来、請適横濱、因托二圓金、買毛織織、十五日晩譲僕兼二於南部静太郎、小笠原寛八次小問来寓、晩酌、早寝、夜雨蕭々

十八日、雨豪、衝雨参官、晩亦衝雨帰、途上水溢脛、閑無事、獨酌
揮洒以遣興、相政僕齋来婢券札、夜雨甚

十九日、暁雨風豪、戸牖皆鳴、早起、十字頃出官、新霽、晩帰、拉
婢葉買故衣服、價十三両三分弐朱、夜飲松川楼

廿日、晴、早起、講大学首章、為小笠原生、々頃日来事、樸茂亦可
愛、出官、無事、出月給証書、松岡同僚帰自鎌倉、云六郷川洪水、
一日滞行客、兼二亦帰自横濱、話其状況、云見大衰非、夜無事

廿一日、秋冷、休暇、朝拉謙児詣神明社、観生偶人、奇巧驚人、晩
又拉、為児買外套、價一圓、夜食鶏肉、無事

念二、夜来微雨、暁起、参官、是日聖誕天長節祝祭、予亦与助神
饌、敬粛之至、殆恫然、午前賜酺、雑歓擾々、各言其志以国雅、予
亦倣傚

天の原渡らふ雁のかりニたに　けふの御宴ニあふか尊さ（列ニけり）　雁の連
ねわたるを見て

猶数首、皆酔後忘却、未後退散、一睡不知

念三、秋冷、官脚発、付書信及末女帯嘱、漾生云、脚子延期、出
官、無事、退食、宿酲頭岑々、与福留生飲一楼、満酔散歩

念四、夜来雨、衝雨出官、無事、諸官員皆献歌頌、予亦倣傚
遠つ人近くつとひて大君の　御代長月をいはふけふかな

是日月給、九月一月拝稟、三十八両壱分三朱、夜無事

念五、晴、出官、無事、未牌退食、拉小野生遊九段招魂社、観角
抵、夜帰買小酔

念六日、秋陰、朝島村生等来話、南部生来訪、談話移刻、未半後歩
街頭、夜帰、無事、是日中村屋書画會、余勉期不往、訪橋詰明平、
患痔

念七、微雨、出官、無事、未後退食、無事、夜弘田泰平来話

念八、晴、出官、鞅掌殊甚、未後退食、無事、夜沿例散歩、下利二
行

念九、暁下利、延医戸梶生受胗、云感時候也、世上極多此症云、告
疾臥養、医付丁幾剤一壜

大晦、秋晴、暖、養痾在舎

（明治三年十月）

十月

朔日、朝陰、休暇、無事

二日、晴、出官、出官講義、晩退食後、夜詣條公邸、公微痾、直辞去

三日、晴、出官、條公使者来官、云公微痾未愈辞客、浴後帰邸、有来客云、讃人今野恰、少話辞去

四日、晴、出官、無事、退食後、訪福羽四位等於駿臺、不遇、夜繞街頭帰、無事

五日、晴、出官、無事、官中遇福羽四位、談事、退食後浴湯

六日、朝陰、中村光杖翁見訪、暫話移晷、供寒具、未前適四谷、下婢亦詣稲荷社、途相遇、買酔夜帰、七字強云、酔臥、戸梶医生来訪

七日、陰寒、無事、出官、稍有感冒氣、早辞官帰臥、看書、豚児等来、小酌、又付児十圓金

八日、雨、寒甚、告疾、終日無事、夜買牛肉、呼豚児等共飲

九日、陰寒、出官、無事、條公近侍之書来、云公今日初参朝、乃夜請謁見、賜座寛話移刻、温潤容人、有古大臣之風、余乗間納約、平生欽慕賢相、今日相遭、喜可知、夜雨、是日僕秀吉来、予不遇

十日、微冷、朝相政使将僕童来、云歳十三、處沢之産、幼喪父、獨与母居、蓋欲使讀書習字、未後退食、与福留生詣琴平社、帰途小飲、散歩街頭、夜聽紫朝劇音、還則更報九字

十一日、雨蕭然、宮崎生来訪、獨酌後、戯揮洒桑名生所嘱梳紙、晩相政拉僮来、与母俱也、被贈酒拳、遣僕寛二佐々木参議贈書一通

蜀山人禁酒歌

黒金の門よりかたき我禁酒　ならハ手柄に破れ朝夷

松魚賣ニ破られし返歌

我禁酒破れ衣と成ニけり　それついてくれやれさしてくれ

十二日、晴、新寒朔風、出官、無事、退食、三字強云、夜拉蛮婢出街買物

十三日、晴、出官、無事、晩拉宮崎生、訪歇児氏、以疾辞帰、与諸生飲酒一楼

十四日、雨、出官、寒冷、無事

十五日、新霽、出官、晩杉本生来話、松岡七助・豚児等亦来晤、団欒話談、七助見示畫

十六日、晴、早起、観劇於猿若街終日、亦有興趣、夜二更帰、疲甚

十七日、晴、出官、退食後、訪麻布中村翁、借書籍八冊来、夜帰、疲甚、宮崎生来、買姚江全集、價四圓

十八日、雨、朝嗽水、喀血三四日、無別所患、但微気上衝、覚腹中拘攣耳、因延医戸梶生受膠、云必胃管也、決非肺血、服牛酪餌、摂養足矣、告官保護、宮崎生来、買牛酪及肉、豚児等亦来看、擁衾話、所謂因疾得閑亦不悪也、爾後無喀血、夜福留生来、見示明朝所報之書稿、最機密也、聊呼盃酬之

十九日、稍晴、無別患處、但覚微頭岑々耳、終日在蓐、諸生来訪、夜医生来診、云衝上宜用下剤

廿日、雨、稍快、但逆上頭痛、因以冷水濯頭髪、故微快、晩福留生来訪、命杯小談、豚児来訪、夜無事、早寝、終夜雨蕭々

廿一日、陰寒、無事、使僕買牛肉、弐朱卜二百文、終日擁衾讀小説

廿二日、陰寒、雨終日不已、諸生来訪、養痾在蓐上、多田少史見訪、暫話辞去、托印鑑及官禄證書、夜無事

廿三日、陰、遂雨、朝福留生来訪、云昨夜急脚来自藩、云去月廿五日後藤、板垣等帰国、爾来密議改革、大参事以下不得参其議、皆於二丸郭中、人情稍恟々、急脚十日発藩、橋詰正見訪、宮崎生及豚児等亦来訪、是日二十一番官舎為余所借○観太公歳書見典却於公廨、借覧四書披雲一箱、飯前飲酒、覚稍快、今日初浴耶湯、夜早寝、雨蕭々

廿四日、稍晴、晩徙二十壱番官舎

廿五日、雨、無事、貼水蛭於両額、各二十、頭痛稍愈

廿六日、新晴、暖甚、買物

廿七日、微陰

廿八日、無事、晩諸生見訪

廿九日、無事

（明治三年閏十月）

閏十月分

朔日、陰寒、無事

二日、晴、見允馴脚之請

三日、晴、三男謙之帰省、十二字発軔、拮据匆々、晩散歩街頭

四日、暖甚、午後訪勝麟太郎於赤坂、談話移刻、柳川書生三人来話、一人識見収、通刺笠間某

五日、微雨、無事

六日、晴、朝南部生見訪、松岡亦来示画、午後拉僮出遊于墨陀堤上、夜帰飲酒楼、是日往来殆五六里許、浴後疲稍已、夜橋詰生来話

七日、寒雨霏々、十一字前忽聽大礮爆発聲、屋瓦為震動、云坂下城内失火、蓋火薬庫也、満街雑沓、人馬繹騒、余等幸養痾擁衾傍観、晩出門観火所起、云弾薬職夫所失、二人即死一人重創、夜半後発腹痛、四字後愈、夜訪松七

八日、暖、無事、福留・吉永等来話、見示画幅西園雅集図、文晁所画人物凡十八名、松岡欲訥以為贋、予則不然、晩訪福沢愈吉於芝新銭座

九日、晴、無事

十日、暖、閑如昨、朝訪北代生於築地、不在、帰観新島原光景、晩詣琴平社、訪安井翁、暫話、夜帰

十一日、晴、朝小野生妻来、致長岡生手翰、乃訪長岡生、別後各無事、暫時命飲、談時勢、戸梶生亦来会、晩帰

十二日、晴、午後拉宮崎生訪ヘルヘッキ氏、暫話、且質所述本教規則、云大意稍合彼意、又喜其概括主意簡明也、未後辞去、夜又訪長岡生、席上遇神原養堂、出羽南部人、復飾称神原精二、在三縁山中、燭見跋、各辞去返邸

十三、晴、晩訪北代忠吉於備前橋下、被命飲、且話且飲、愉快亦極矣、遂投宿

十四日、晴、朝帰自北代氏、付書信於官脚子、夜又訪長岡生、暫話

十五日、晴、南風終日不已、擁爐看書、無事

十六日、晴、風未止、書生来訪、未後訪神原先生於江都南、日晡帰邸、早寝、是日観米苇肉筆及唐寅之七絶、米則不知其真贋、唐則無容疑、最可愛

十七日、寒、沽酔防寒威、終日不出、書画買来、示鳳某眺海図、臺山夏村図、臺最有精神、松欲訥買此喜云、價四圓餘、晩寒原氏来訪、暫話、直辞去、是日謙吉氏亦来晤、皆為予周旋

十八日、晴、散歩神田辺、訪穂積生、微酔

十九日、午後訪古鼈（フルベッキ）、暫話、會米人来客、早辞去、歩下谷辺、飲雁鍋、夜訪春木琴村、酔帰

念、晴、朝少々喀血、爾後頭岑々、貼蜆針、終日不出、書生来、松七見訪

念一、暖、豚児来話、吉永生来談予事、山根生来訪、未前散歩、訪宿人竹内生

念二、晴、長岡生来訪、神原清次及佐賀人三岡生訪来、命飲、晩蒸船着、板垣氏等来、尾崎生来、報信云、姉君病、夜訪

念三、晴、朝訪尾崎生収家信、無事、晩北代生等来訪、与長岡・尾崎三人、擁炉劇談、命飲、且飲且談、尤有興味、豚児亦来倍（陪）

念四、晴、咳甚、晩訪竹内生、不在、夜不出、早寝

念五、晴、稍寒、福留生見訪、為余談心事、被命帰国云、来月初旬中、宜発此地、薄暮訪長岡生、不在、直帰

念六、晴、大風埃、朝擁炉看書、拉児訪古鼈氏、不遇、帰途訪長岡生、暫話、為後図

念七、晴、美日、是日兵隊等帰郷、未後訪神原氏、夜微醺

念八、晴、終日不出、北代・長岡両生見訪、々尾崎生、夜火浅草辺

念九、晴、無事、是日

皇帝幸于氷川神社、一宿一昼夜、訪藤川・穂積二子、遂相拉飲浅草奥山、備人蒲毛某来遊

（明治三年十一月）

十一月朔、晴、無事、午後雨蕭々

二日、午晴、無事、長岡・北代二生来、終日不出、書林来、齋洋書

三日、晴、朝諸生来訪、北代生遂宿、談心、終夜尽情事

四日、朝帰、晴、訪歇児別（フルベッキ）氏、話移甚、贈寒貝、帰路迂路于糊渓、夜帰、寒甚

五日、晴、詣水天宮、帰途訪岩下、有客、直辞出、訪神原氏、帰途過北代生、直辞去、夜繞島原花街帰

六日、風埃、朝書肆来、整頓書籍、南部生来訪、未後往條公、不在、托神書八冊并草稿数部、迂途訪長岡生、寒原亦来会、夜帰、途中有缺月

霜月の六日月を思ふ友　ふみて帰るぞ楽しかりける

明日約共訪歌兒氏

七日、晴、寒、午後神原精二来、倶訪歌兒別吉氏、暫話、移斝、夜帰、飲一楼

一筋に思ふこゝろハテレカラフ　幾千里をも隔さりけり

八日、晴、寒、訪尾崎及福留

九日、晴、無事

十日、晴、無事、終日不出、諸生来、応酬不暇

十一日、晴、無事、南部生早朝来訪、諸人来訪、不暇応接

十二、晴、寒甚、諸生数輩来訪、夜謁輔相條公、南部生亦来会、賜酒、因云所欲言、至燭見跋辞帰、霜月已高、夜已三更矣

十三、霜、晴、寒威、是日免職辞疏本官、贈書青柳・松岡及多田生

十四、晴、無事、諸生来訪、池生告別来、云将之奥羽辺、晩青柳・高鞆来訪、命飲、是日書肆封書数百種

十五、晴、無事、磯部氏来訪、云十七八日約返金、晩訪竹内万次郎

十六日、微陰、寒将釀雪、擁炉看書、午前訪尾形微醺、米川生来、相携會青柳氏、是日會者殆十人矣、曰小河、曰権田、曰師岡、曰青山、曰奥、曰三輪田、曰間、曰某、与余、日晡辞去、訪訪福羽四位於表六番街、不遇、蹈月帰、月色奇明、青柳席上、書臥なから咲野菊の意を、逃醉早帰

十七日、陰、朝長岡生見訪、吉本生亦来、遂相携飲賣茶亭、雨甚、乗醉命竹兒子、遊猿若、舞妓侑酒、醉甚、終宵雨豪、徹天明未已

菜の花にうつとなりて舞小蝶　まようふもよしや夢の明ほの

又　まはされて咲世とはしらすや

十八日、風雨、入劇場、且飲且観、余宿酲未已、返楼一睡、故不見一闋、夜冒風雨、駕一葉帰邸、已報三更

十九日、新霽、無事、磯部生返金二圓二分、残金念二云、贈婢八圓金

廿日、午前微雨、無事、訪板垣氏、長岡亦来、吉本生之白川縣、余

贈哥
　来む春の梅の盛を同しくハ　君と住田の花ニ遊はん
夜拉婢散歩、共喰蕎麦
廿一日、晴、無事、訪多田少史于猿楽街、不在、帰途訪佐々木参議、亦不在、買書帰
廿二、陰、無事、長岡生来、午後訪川瀬石街、夜無事
廿三、微雨、寒、無事、晩晴、乞千枝田翁於観相、夜帰
廿四日、雪、雨森来訪

十月十二日より
十二日　一、壱分　賄
同　一、壱分ト五百文　夜遣銭
十三日　一、弐朱弐百文　牛壱升
十五日　一、弐分弐朱　猪佐馬江遣銭
十六日　一、壱両壱歩餘　劇場二人
同　一、壱分　秀吉江遣銭
十七日夜　一、四両也　須原屋宮崎生取次　陽明全集
十八日　一、弐分　謙之
同　一、三分　牛酪ハ壱分三朱肉ハ弐朱ト二百文　牛酪及肉等
廿一日　一、弐朱ト弐百文　牛肉壱斤
廿一日　一、弐朱壱　諸遣銭
廿日　一、弐分也　後ニ而返来、ニより六迄　経済原論四冊　兼次江渡
廿一日　一、三両也　福健同伴ト云　猪佐へ
廿一日　一、壱分　札九枚分
廿一日　一、弐朱ト百七十二文　牛肉壱斤
同　一、弐朱ト二百文
廿二日

一、弐朱　あんか
廿三日
一、弐朱壱　謙之手拭
廿六日
一、五両也　スム　西村生江寸借
同
一、三両弐歩三主　みやけ　柳川つむき綿入
同
一、三分　□りいろ〳〵
同
一、壱両　買物　謙之
一、壱歩弐朱　同　牛肉
一、弐朱二百文　ばん
一、弐朱　リキウ酒
一、壱朱
三日
一、壱両　小笠原生江餞別
同
一、弐歩　謙之遣銭
四日
一、三両也　婢月給
九日
一、五両　三両藤本生、弐両児収　豚児江
十五日
一、弐分　賄
十七日
一、壱分　遣銭
同
一、弐朱二百　牛
同
一、壱朱　はん
同
一、壱分　諸買物
壬十月廿三日
一、十両　十一月四日、五両返ル、弐両半未　磯部親興
一、二分　賄
一、壱分　牛いろ〳〵
廿四日
一、壱分弐朱三百　駄荷壱
廿五日
壱両三分　胴着
弐朱ハ引筈也、弐分三朱
右、十二月廿日過迄ニ払筈
廿六日
一、壱両　生田戸梶　薬代

同　　一、壱両　　いさ
一、壱分三朱　　めり安縮番
同　　十九日
一、拾六匁五分　　髪剃、と石共　　一、弐両弐分也　　磯部より
壱分ト三百文　　弐両弐分未、廿二日来筈
十一月六日　　廿日
一、弐両　　いさ馬江　　一、壱分　　賄
同　　同　　一、壱朱　　遣銭
一、三両　　藤本生よりモトル　　廿四日
四日　　一、弐分　　川瀬□街祝義
一、五両　皆済　　磯部より受取
四日　　（別冊子）
一、弐分　　賄　　「　明治三庚午秋九月
五日　　在東京
一、三分弐朱半　　さかみや　　備忘日録
一、壱分　　賄　いわしや　　紀　正由」
一、三分　　薬代
一、壱分　　賄　　任状
廿日　　長廣紙　前四寸計オキ名　後二寸計余白
一、壱分　　牛いろ〳〵　　何氏某
十九日　　任神祇官権大史
一、八両　　くに祝義　　任宣教使少講義或少史
同　　支干月日

神祇官
何某

又
當官御用掛　申付候事
但何心得或ハ出仕

神祇官

又
當官附属申付候事
免職拝命
依願免職務
受付課ニテ張紙ヲ付ルト否トハ見合ニテスヘシ、官幣神社調且諸届類ハ徒朱字月日ヲ署テ可也、願伺等ニ係ル分ハ、従前ノ通張紙ヲ付ル筈ニ定マル　十月二日記

十月二日
富島・田中・茨木・佐藤・近藤
〆五通
東京在勤申付候事　認ム

四日
宣教使ニ掌等任状　認

五日
依願免職務

佐伯中講義

六日、例之通休暇
七日、雨
拝命任状ハ常式之通、一体之宣式ニ認候事、其餘小々之事跡、假令ハ執法掛差免之事抔ハ、餘リ長義ニ認も費ニ而、不可然、壱尺五六寸位、是亦一定式有之度候事被命
仮任状ハ時々認、本任状堅紙ハ其月之分、月末迄ニ取調認候様被命、少史江中次筈

大崎宣教権少博士

近来轉字ナシト云
轉任宣教使少博士
庚子十月十五日

神祇官
大崎・内藤・村田
三人任状認候事

十月十五日

十月十五日已後、受附録江一切記置候事被廃止、但付紙月日等ハ越方之通、権少祐より被命
十七日、三澤少史依願職務御免之状認ム
湯治願　——何某
——快復ニ及兼候ニ付而者、湯治養生いたし候ハヽ可然旨、医師某申聞候間、——入湯いたし度、何卒寛大之思召を以、今日より五十日之間、御暇被下置候様、只管奉懇願候、已上

名前

本官御中

百七十九万二千四百七十余年神武紀
天孫下世ヨリノ年数トセズ、大数ヲ爾前ニトリ、第一別天五神ハサシオキ、第二神世ヨリ、第三天照大神ノ神（後欠）

京師当時智識五大禅師
備前岡山・義山、京・獨園、京・越渓、海洲、臣道

庚午十一月二十四日
十一月廿四日、雪降、寒甚し、早朝例の灌水を行す、雨森生来話、午後豚児来、共傾盃、是日本官より使来り、書あり、云

奥宮周次郎

御用之儀候間、明廿五日朝十時、禮服着、當官江出頭可有之者也

十一月廿四日　神祇官

晩土方氏を訪ひ、是事を話す、婢をして羽織をあつらへしむ、但紋縫等也、金弐分遣す、豚児ニ金四圓を贈る、今月合て五圓三分歟、畏迂寒終日不出、擁炉看書、夜無事、雨雪歇寂々

念五、新霽、十字前出神祇官、兼而願之通、被免出仕、午牌退出、於官衙遇諸官員告別、殊ニ多田荘造、特懇ニ惜別、一昨廿三日夜、神田鍋丁ニ而南校雇入の英人某二名、暗殺セラル、因て太政官より御沙汰書あり

昨夜廿三日、於神田鍋丁南校雇入之英国人二名、及暗殺候者有之ニ付而者、宮華族并諸官員家人陪従之者、一々遂吟味、昨夜外出之者ハ行先等委細取糺、疑敷儀有之候へハ、早々可申出、万一隠匿シ、後日發覚候ニ於テハ主宰之落度急度可被及御沙汰候条、此旨可相心得事

十一月廿四日夜　太政官　各官省廻シ

念六、晴、無事、朝訪北代生、不在、晩往箭庫、訪佐藤氏、亦不在、返一翁行状、夜無事

念七、霜霽、無事、談僕弘田生之事於正木琢一、又托事於福留氏、晩賣物、夜武市生来訪、談支那行之事情、甚可聽、豚児亦来会

念八、風埃、稟納官禄金三十三両三分、銭三百廿四銭、福留氏亦来、観一寿老人之図、識見高邁、可喜、晩訪福岡参事、不遇、夜無事、獨酌、早寝、是夜九字火船来自坂

念九、寒威砭肌、岩神行蔵来訪、暫話辞去、童僕云来月二日蒸気船発程

大晦日、晴、無事

（明治三年十二月）

臘月朔、晴、寒、拮据匆忙、諸生等来訪、甚多不暇応接、佐々木参議亦来、余不在、遇門外、夜伊賀生来訪、命蕎麦酒、歓晤移刻去、

拉婢聽話家、十字帰寝

各衣来つゝなれしをいつしかニ　けふきぬ〳〵となるそ悲しき

二日、晴、朝早起、拮据匆々、獨酌、擁炉応接送別人、十二字後発邸、従鍛橋下乗下村氏之小船、米藩森・新保二子送来、下村舟中且飲且談、酔眠中達横濱本船、夜又飲已有夜泊ま状況、是日大参事二人、宍戸・福留未来云、明後将来此

三日、夜来雨蕭然、徹暁歇、座小舟遊横濱、飲一酒楼、与森澤子別、独反本船、而認本船不詳、処々狼狽、時風大起、将上一船、云米船将往米、即又換小舟、漸認本船、々中同房宍戸・福留二子也、酔眠徹暁、是夜犹泊横濱

四日、晴、無風波、是日衆多上陸、余則懲昨不上、夜六字解纜、風波逆悪、船不進、至夜半益甚、遂碇泊遠灘御前岬北

憶弟

憶弟亦知弟憶兄、雁魚無影海茫々、恍然夢破驚危坐、身在七十五遠洋

船中偶成

火船万里破狂瀾、休道人間行路難、況有芙蓉旧相識、披雲天外露屏顔

おもひきや遠つ近江の浪のうへに　ふしを枕にたひねせんとは

汝よふし雪を頭ニいたゝけと　もゆる思ひハまやすや有らん

五日、晴、犹泊遠灘、舟中頻与南京人筆語、是夜鼾鼾、縦談遣悶、板垣参政謂衆曰、各断髪易兒如何、衆称善、予首払頭、山田子為鉗髪、同断髪者凡八人、相顧大笑、亦為一客況

胡越同船猶問弟兄、何況同志起扶桑、揮刀断髪盟何事、欲将戮力助富強

六日、晴、暁発遠灘、風浪亦逆、船不太進、且器械少損、不能増炭、無聊亦甚、團欒劇談

七日、晴、朝十字、達兵庫碇泊、欲換船乃上陸、宿本陣、訪匡道禅衲于平野村詳福寺、時行施餓鬼法、暫話辞去、夜観劇、雨蕭々、徹暁不歇

八日、雨、晩晴、与衆往神戸、帰途迂路拝楠公廟、又訪匡道、談話移晷、被命飯、予請書一語、老衲云、近来老懶、不作字、乃見贈嘗所書暮雲遠山一則、且叮寧垂示、余亦恍然、若有省、辞去将出門、雛僧打晩鐘、声々徹心骨、忽得二句、懶足為詩

晩鐘撞破卅年夢、依舊暮運帰遠山

夜無事、酔眠早寝

九日、新霽、十二字後換船鶴号、発兵庫港、夜風便頗順、船尤迅、夜風浪平穏、早寝、暁寤不眠、上甲板観山容、蓋故郷山、或過東寺岬矣、又就寝

十日、晴、平明、衆大擾々、云已近浦門、乃起推蓬窓、則近在目睫前、然潮落不能入港、小舟来載物云、余等亦上陸、告別板垣氏等、買小舟帰布山、稚子俟門、家人喜迎、團欒情話、隣曲来賀、共飲酒、夜蓋二更矣、夜小雨

十一日、晴、無事、午前潮江、禮弟来訪、出丹醸割鮮、小畑生来訪侍、晩禮弟帰、余酔眠不知、夜晏寝、是日諸官休暇

十二日、陰、寒威最酷、養痾不出、晩諸客来賀、命飲大酔、就寝

十三日、朝微雨、後霽、予養痾不出、掛川街伴来、云今日十字可出政廳、予則答以養痾告官、中山源次郎、小畑生□□（判読不能）来話、夜往江口宿

十四日、晴、十字参政廳、遇山本姪、訪族長談事、晩至掛川街及潮江、夜帰布山、弘田久助官書来云、明日有公事、必可出

十五日、晴、早往府、途遇縫生、披封蒙命大属書記、出官拝命、辱係改革議、頗参密勿

印紙

奥宮周次郎

第五等官大属書記係

官秩四十石　未春定五十石

夜帰布山、隣近来賀挙杯、早酔眠

きのふ立春の朝、遠山の霞
またき立春をみよとや今朝ハはや　遠山眉に薄霞せり

十六日、晴、出官、拮据匆忙、草喩告文、晩帰

十七日、出官、改竄草稿、謀岩崎生推敲、夜帰

十八日、寒甚、出官、頻議改正事、橋本同僚建白大禄更削議、余亦同之、参政不可、余又論之、遂不決、夜醸雪、宿江口、是日岩崎生又草喩文

十九日、出官、出余及岩生喩文、乞裁批、参政遂取余稿、夜宿江口、有祖祭

二十日、晴、朝訪弘田・竹村、出官、喩文脱稿、夜退食、帰布山

念一、晴、休暇、終日客来、応接不暇、高崎生来乞借英和辞書、乃齎去、約四五日

念二、寒、早出官、匆々不暇、夜帰布山、夜無事、諸生来話

念三、晴、早起、出官、是日去婦、夜帰布山

念四、晴、出官、大改革令発、召族長、晩訪潮江遂宿、夜雨蕭々

念五、朝雨、午晴、出官、夜大退衙、乙政生招飲、微醺、遂宿江口

念六、新齋、猶有官事、今朝余則賜告帰布山、暖甚、山本姪来命飲

念七、寒拮据匆忙、償價二十四貫

念八、晴、寒、無事、潮江禮弟来、命飲、話田

念九、寒、微雪、拮据最甚

梅柳六本の松をそのまゝに　門のかさりとする山家かな

貧乏と女房も共に逐やらひ　恵方を迎ふとしの暮かな

参考一、皇朝身滌規則

（明治二年十月頃草稿、明治六年七月出版）

皇朝身滌矩則

題言

人間ハ特ニ　天神ヨリ霊魂ト云モノヲ分チ賜リテ、天地間ノ活物中ノ最モ貴重ナルモノナレハ、所謂天地人三才ト並稱スル徳アルモ此ヲ以ナリ。禽獸等ハ如何賢コキモ此霊魂ヲ全ク具スルモノナシ、故ニ智慧ノ大ナルモ意慾ノ逞シキモ、復禽獸等ニ比スレハ深ク且大ナリ、其霊魂ノ儘ニ率フテ善ニユクヲ神髄ノ神道トモ稱シ、其知慧意欲モ亦隨フテ愈善ニ進ムモノヲ君子トモ善人トモ云、若シソレ五官ノ儘ニ任セテ悪ニ流ル、ヲ私慾トモ非道トモ稱シ、其知慧意欲亦隨フテ愈悪ニ進モノヲ小人トモ悪人トモ云、實ニ恐ルベキモノハ人間ナリ、況ヤ耳目鼻口四支百體悉皆其意欲ヲ資クル器ヲ備ヘテ、而カモ甚タ自在ナルモノアルヲヤ、禽獸ハ從來コノ霊魂ヲ具セザルガ故ニ、其知慧意慾モ人間ニ比スレハ浅且小ナルモノナリ、孳尾交接ノ道モ禽獸ハ自カラ時定マリテ恣ニ情慾動カサルハ、却テ人ヨリ正ニ似タレドモ、是乃禽獸ノ禽獸タル所以ナリ、故ニ禽獸ハ人ニ比スレハ自ツカラ罪科ヲ造ルモ寡少ナル也、是亦人ニ勝ルニ似タレドモ、自ツカラ制セラル、所アリテ然ルニテ、乃人ニ若カサル所以ナリ、人間ハコレニ反シテ知慧意欲盛大ナル故ニ、意知モ亦多巧ナルナリ、故ニ知テ犯セル罪、知ラスシテ過テル科、反テ禽獸ヨリ多キモノナリ、之ヲ一々自ラ知リ自ラ改メントスルハ、聖賢ニアラサレハ中々凡庸ノ及ヒ難キ所以ナリ、於是政刑法令ヲ設ケ、治化ヲ助ケシムルハ蓋已ムヲ得サルニ出ツ、古語ニ爲悪於顯明之中者帝王得誅之爲悪於幽冥之地則鬼神得罰之ト云ヘリ、然レハ其罪科現然露顯スルニ及テハ、王法ノ容サ、ル所アルハ人々皆ヨク知ル所ナレドモ、其罪科僥倖ニ人ニ知ラレスシテ、偶々王法ニ免カレタル者アルモ、竟ニ鬼神ノ冥罰ヲ免カレサルハ推テ知ルヘキナリ、然ラハ唯其罪科ノ露顯スルト否トノ殊ナルニテ、其人ノ罪科ヲ免カレス、本人ニ於テ何處迄モ底氣味アシク愉快ナラサルハ一ナリ、我カ太上開国ノ　神聖深ク此ニ見ル所マシ〳〵テ、祓除身滌ノ法ヲ立玉ヘリ、是即　皇

朝神隨ノ教ト稱スルモノニシテ、上代法律ノ濫觴ナリ、故ニ上代ニハ別ニ教法ト云テ、每人每戸ニ說諭スルコトナク、況ヤ刑法ト云モノナク、唯人民ニ罪科アルトキハ時々コノ法ヲ行ヒ、心身ヲ祓ヒ清メサセ玉ヒシカ、後ニハ遂ニ一年二度六月晦日十二月晦日、諸王百官ヲ朱雀門ニ召集シテ、一同ニ之ヲ行ハセラル、　朝廷ノ一大重典ト定マレリ、此法實ニ大易簡大寛仁ノ政教ニテ、乃億兆ノ民心ニ徹通シテ有難ク思ヒ入、　寶祚隆盛萬國ニ比ナク、天壤無窮ナル所以、實ニ此ニ基クト見ヘタリ、方今王政一新開明ノ政教ヲ敷カセラレ、大ニ教化ヲ四方ニ宣布シ玉フ秋ハレハ、我カ固有ノ本教ヲ本トシ、之ヲ實事ニ顯シ、弘ク億兆ニ罪科ヲ祓除洗滌セシムルノ旨趣ヲ知ラシメ、　皇教ノ大易簡大寛仁ナルヲ仰カシメントス、而シテ其之ヲ助クルニハ、ヤハリ從前ノ儒佛二教ヲモ雜ヘ用ヒ以テ、　皇教ノ宏大包括セサル所ナキヲ知ラシムト云

規則三章

○人一生罪科過ノ一ツノナキ者ナケレハ、内心ニ罪科過ヲ犯シタル覺ヘアルモノハ勿論、若シ少シモ其覺ヘナクトモ、或ハ忘却セシモアルヘケレハ、此ヲヨク〳〵省ミ、精々悔ヒ改メ、眞心ニ　神明ニ誓ヒ奉リ、所謂今日ヨリ始テ罪ト云罪ハ有ラシト祓ヒ清メ、只管悔過自新黙禱スルヲ要スヘシ

○祓除身滌ヲ行フハ便宜ノ地ニ於テスヘシ、水邊ヲ佳トスレトモ、所ニヨルヘシ、又茅輪ヲ作リ、氏子殘ラス脱ケシムルモ可ナリ、祭式ハ布告セシ所ノ式部ノ正式アリ、之ニ準シテ、或ハ簡約ニスルモ妨ケナシ

祭式別ニ式部寮ヨリ布告セシ第七號アリ、可參考

○每歲六月三十日、十二月ハ十五日ヲ以テ定式トスヘシ、時アツテ臨時コレヲ行フヲ許ス、祭中護衛ハ縣廳官員戸長等コレヲ勤ムヘシ、是亦古ヘ祭政合一ノ遺法ナリ

こハ奥宮先生のかゝれたる書なるか、いとよく辨へられたりけり、されハ御禊祓の事ハ皇國の大典なれとも、世の人心得かてなるもおほけれハ、こたひ乞ひて世に弘むるになん

身滌規則跋

余此土州の人氏奥宮某か記せる神道の略書を讀み、殊に奇絶を覚ふ、夫此人の如く高邁の齡にして、心身を清浄にせんか爲に、本心より眞實に神道の眞教を求るの壯なる、甚感悦に堪へす、況や末條に掲くる要義の如きハ、余始て東方にも亦此妙法あるを聞く、抑世上億萬の蒼生、眞神よりこれを見れハ、尽く罪科に汚れさるものなし、此罪科を一掃せんと欲せは、祓除の法を行ふへき事、但此法を行ふハ即各人其己を創造せる造物主（即眞神）に致すへき本務なるを以て、各自ら之を行ふへく、神官等ハ固より造物主に代て人罪を宥すの権ある者に非れハ、敢て之を託すへからさる事、且縱令各人此法を行ふとも、更に我欲の心よりすへからす等の條々、西教の中にても迷誤なき教法の旨に相合ひ、殊に歐羅巴にて「ヂースム」（日本の神道の如き教）と唱ふる教法と恰も相似たり、若し日本國中の人、老若男女に拘らす、此老人か爲す如く、其本心より眞教の旨を了知せん事を求め、且ハ國の安全を祈るものあらハ、眞旨ハ忽ち瞭然たるへく、風俗の

開花も期して俟つへし、蓋余か右の如く意見を述るものは、此奥宮氏なる者行状正潔の士にして、嘗て一釋僧か余か誨を受けて却て余を誣ひたるが如き比に非すと思へはなり

於東京

一千八百七十年十二月第廿七日

明治六年七月得官許上梓之　　大山祇神社宮司兼權大講義　木村信兢

参考二、「人民平均ノ議」草稿（明治三年十月頃）

人民平均ノ議

一、士族文武ノ常職ヲ止メ、同一人民中ノ族類ニ帰スル事

一、官員兵隊ヲ立ルハ官等官禄ヲ以テ士族卒平民中ヨリ撰擢スヘキ事

右案、夫士ハ徳川氏武治ヲ以テ天下ヲ封建シ、藩国各其士ヲ養テ君臣ヲ結ヒ、護衛ノ武職トシ、級禄ヲ与ヘ、以テ之ヲ世襲シ、又其平民ト域セサル者トス、今日　朝政一新、藩国其士民版籍ヲ朝ニ帰シ、郡縣ノ体ト成、華族士族ヲ分テ従来ノ君臣を止メ、猶宇内各国開明ノ地ヲ参シ、務テ旧習ノ固陋を除キ、進歩日進ス、然ニ士族人民ノ一類に帰スト雖トモ、文武ノ常職ヲ帯テ官員ト成リ兵隊ト成ル、亦多ク士族ニ限ル故、平日士大夫ノミ専文武学課ノ責メアツテ、農工商ノ如キハ人民同一ノ智識ヲ拓クヘキノ責ナシ、是其開明諸国ノ無キ所ニシテ、人爵ヲ以テ天爵ヲ奪フノ甚キ者ト謂ヘシ、今日ニ至テハ此陋習ヲ一洗シ、士ノ文武常職ヲ止メ、同一人民中ノ族類ニ帰スヘシ、唯士族タル者如斯ナラハ、却テ其常職ニ慣安シ、徒爾坐食スルノ弊ナク、人民各其智識ヲ研究シ、勉励報国ノ志アルヘキハ天職タルヘシ

一、士族ノ禄制ヲ変シ、更ニ禄券ヲ給シ家産ト視做スヘキ事

右案、士族常職ヲ解ク、別ニ兵士常備ヲ立ツヘシ、故ニ従来世禄何分一ヲ削テ兵士ノ給ニ充ツ、其何分ノ二ヲ以テ定禄トシ、更ニ券ヲ与ヘテ、之ヲ子孫ニ傳ヘ、以テ家産トス、其券ヲ割テ賣買スル、亦許スヘシ、唯士族概祖先ノ功禄世襲ニ依テ今日家産ノ基ヲ為ス故ニ、縦令何分ノ一ヲ削ル、亦更ニ其高下加減ノ平均ヲ論スヘカラス、且士族ニシテ官ニ入ル、官禄ヲ給スヘシ、家産ノ禄額ヲ視サル也、兵隊ニ入ル亦同シ

一、藩廳ヲ視テ一藩ノ民政司ト做シ、国民一般戸籍ノ法ヲ立ツヘキ事

右案、士族卒ノ分界ヲ明確スルハ、猶朝廷ノ御沙汰ヲ得テ之ヲ定メ、従来ノ民政司ヲ廃シ、郷正以下ハ等外ノ士司官トシ、藩廳中戸籍司ヲ置キ、士族卒平民非人穢多ノ品種ヲ分ツト雖トモ、各其戸口検査ノ法ヲ以テ一般ノ国民タルヲ示スヘシ

職制表戸籍表ハ別ニ之ヲ載ス

付紙

禄券ヲ以テ家産トシ、其券ヲ割キ賣買ヲ許スノ上ハ、向後漸次此禄券ヲ政府へ買上テ消没セシメ削禄何分ノ一兵ニ充ツルノ余分ヲ積シ、買券ノ資トス自然官禄ノ外、別ニ廩禄ヲ仰ク者無之、士卒平民同般ニ田地山林等ノ恒産ヲ得セシムルノ目的トス

布告案

此度学制御改正ニ付、追々各地小学等之御設も可有候へとも、人民教育之儀ハ一日モ不可忽を以、士族卒平民孰も平日相嗜居之学科、於私塾教授勝手次第ニ被仰付、従今開業之輩可届出筈

但此迄開業之輩も同断届出之筈

私塾学科

一、書学
一、算学
一、句讀
一、経書講釈
一、史学大意
一、洋学初級
一、私塾ト可相成地所、或は廢寺等見立して可申出、御詮議之上、最寄を以可相渡
一、於私塾も更高等之学科をも教授可致、尤於学校検査之法、追々相立筈
一、女子之塾准之、且女工之科を立へし
一、寺僧と雖も右之学科を教授いたし候ハヽ、寺僧之身分其儘ヲ以、開塾致し候儀、勝手次第
一、於私塾教授致之上ハ、相當之謝禮可相受

已上

参考三、「喩告」（明治三年十二月）

夫レ人間ハ天地間活動物ノ最モ貴重ナルモノニシテ、特ニ霊妙ノ天性ヲ具備シ、知識技能ヲ兼有シ、所謂万物ノ霊ト称スルハ、固ヨリ士農工商ノ隔モナク、貴賤上下ノ階級ニ由ルニ非ル也、然ニ文武ノ業ハ自ラ士ノ常識トナリテ、平生ハ廟堂ニ坐テ政権ヲ持シ、一旦緩急アレハ兵ヲ執リ乱ヲ撥スル等、独リ士族ノ責ノミニ委シ、国家ノ興亡安危ニ至リテハ平民曾テ与カリ知ラス、坐視傍観ノ勢トナリシハ全ク中古封建制度ノ弊ニシテ、貴重霊物ノ責ヲ私シ、賤民ヲシテ愈賤陋ナラシメシ所以ナリ、方今王政一新、宇内ノ変革ニ基キ、封建ノ旧ヲ変シ、郡県ノ政体ヲ正サントスル際ニ当テ、当藩今日大改革ノ令ヲ発スルハ、固ヨリ　朝旨遵奉シ　王政ノ一端ヲ掲起セント欲スルカ故ニ、首トシテ従前士族文武常職ノ責ヲ広ク民庶ニ推亘シ、人間ハ階級ニヨラス貴重ノ霊物ナルヲ知ラシメ、各自ニ知識技能ヲ淬励シ、人々ヲシテ自主自由ノ権ヲ与ヘ、悉皆其志願ヲ遂ケ使ルヲ庶幾スルノミ、抑古ニ士ト称スルハ有志有為ノ称ニシテ、必シモ門閥ノ謂ニ非ス、然レハ其霊妙ノ性ニ基キ、更ニ知識技能ヲ長進シ、報国ノ誠心ヲ尽サントスルハ、凡ソ人タル者ノ天地間ニ逃レサル大義ニテ、殊ニ　皇国ハ人ノ資質純厚義気最モ烈シキ風俗ナレハ、今一段文明開化ノ道ヲ講習シ、各所ニ学校ヲ興シ、教育ヲ隆ニシ、富強ヲ謀リ、士民一般競起奮発ノ域ニ勧進セシメ、大ニ旧習ヲ変シ、務メテ新得ヲ来スハ、実ニ当今ノ一大急務ニアラスヤ、既ニ近頃普仏ノ戦争ニ仏国屡敗ヲ獲ルト雖モ、其民挙国憤興シ、愈報国

ノ志強ク、其都府長囲ヲ受ケテ猶屈セサルヲ聞ケリ、是亦人ヲ重ンスルノ制度ノ善ナルヲ観ルニ足ル、故ニ皇国ヲシテ万国ニ対抗シ、富強ノ大業ヲ興サシメンニハ、全国億兆ヲシテ各自ニ報国ノ責ヲ懐カシメ、人民平均ノ制度ヲ創立スルニ若クハナシ、若シソレ改革ノ条件細目ニ至リテハ、往々布告ノ令ニ拠テ之ヲ詳ラカニスヘシ、或ハ其意ヲ誤リ認メテ、士族ハ文武ヲ廃シ安逸ニ就キ、平民亦其職ニ惰リ、且徒ニ士族ノ貴ヲ抑エ、民庶賤ヲ掲ル等ノ疑惑ヲ生スヘカラス、唯今日宇内ノ形勢ヲ審ニシ　朝廷大変革開明日進ノ事情ニ通シ、人情貴重ノ責ヲシテ士族ニ私シ、平民ヲシテ賤陋ニ帰セシムルノ大弊ヲ一洗シ、人民自己ノ貴重ナルヲ自知シ、各互ニ協心戮力、富強ノ道ヲ助ケシムルノ大改革ニシテ、畢竟民ノ富強ハ即政府ノ富、民ノ貧弱ハ即政府ノ貧弱、所謂民アツテ然後政府立チ、政府立テ然後、民其生ヲ遂ルヲ要スルノミ

覚

今般人民平均ノ理ヲ以テ士族常職ヲ解キ、農工商ハ活計業ト相成、国士ニ報ルノ天職ヲ立ルハ、士族平民各一般ノ人道タルヘキ義ニ付、従来階級ニ依而被定置候廉々被廃之、唯士民各相互ニ礼譲ヲ守ルヘキハ不及沙汰候事

一、士族無礼者手討ノ権力勿論廃止之

一、服色鞭裂羽織并紐等勝手次第、兵隊軍服ハ従前之通、尤牡丹ハ制限ナシ

但平民袴上下着勝手次第

一、官人及士族廃刀勝手次第

但卒ヨリ平民ニ帰シ、或ハ平民従来帯刀致来リ候者、本文ニ同シ

一、士族平民共馬上勝手次第

但平民ハ藩内限リ、尤他所ハ其地ノ制ニ従ヘシ

右之通ニ候事

十二月